シャッター以後ー 5

「バヤン、あるいは手風琴による陽気なる哀切の和音が……」

表紙写真●本橋成一
文●村石　保

本橋成一写真集にはロシア式アコーディオン＝バヤンを、よく見かけたように記憶している……。

秋の収穫祭の時季になると、町から舞踏団がやってくる（写真集『アレクセイと泉』より）。女たちの透けるような白い肌に刺繍をほどこした民族衣装がひときわ映える。
合唱団や舞踏団には、決まってバヤン弾きがいる。ベラルーシに限らず、ヨーロッパではアコーディオンの周りには、いつの間にか人だかりができ、ごく自然とコーラスが始まり、やがてダンスの輪が波紋のように広がってゆく。
これは単なる聞きかじりにすぎないが、アコーディオン（手風琴）とは、「和音」を意味する「accord」に「器」を意味するギリシャ語の接尾語を組み合わせたものだという。
移動民族ロマの生活に、アコーディオンとギターは欠かせない。アルゼンチンに渡ったアコーディオンは、バンドネオンとなりタンゴを奏でる。ピアソラのバンドネオンは、猥雑にして、かつ人の心の哀切を極める。アコーディオンもバヤンもバンドネオンも、あたかも恋人を胸に抱え込むようにすることで、奏でることが可能な楽器である。
バヤンの音色は、陽気と哀切の往復運動にある。だから人々はまた、その和音に引き寄せられるようにして、刹那の歓びを享受する。

私の仕事場の壁には、モノクローム写真の大きなポスターがある。老人の眼差しは虚空にあり、その両腕に抱えられたバヤンから、ヒトの世のため息にも似た哀切がこぼれ落ちているかのようだ。
ポスターのタイトルは、「ＮＡДＥЖДＡ　ナジェージダ＝希望」とある。

オリーブの木を植える

鎌田　實

3月7日～14日、ＪＩＭ－ＮＥＴ代表（ＪＣＦ理事長）鎌田實は、ヨルダン・シリアからイラク北部の難民キャンプを訪れた。パレスチナ難民が1700人暮らしていた。イラク開戦から5年、国内外の難民は400万人といわれる。私たちは、数値で括ることのできない一人ひとりと向き合っていく。私たちが大切にしたい、今ある一人ひとりと。

グランドゼロ GROUND ZERO JCF 75春

目　次

イラク難民キャンプ訪問

オリーブの木を植える　＜鎌田實＞　5

ベラルーシ訪問団報告

常（つね）と異なること　＜小池保實＞　12
第88次訪問録　＜藤牧久芳＞　16
2008年4月26日
私たちの暮らしと海を越えた友人たちを想う日に！　18
「ナージャの村」「アレクセイと泉」
アンコールロードショー　20

イラク支援
バレンタインキャンペーン

限りなき義理の愛大作戦2008　21

連載＆お知らせ

ベラルーシの食卓　26
モスクワ便り　27
連載随筆「象られた微笑み」　＜宮尾彰＞　28
ロシア小話　30
振替用紙のメッセージから　32
ありがとうございました！　34
バレンタインコンサート　36
がんばらないレーベル好評発売中　38
ＪＣＦオリジナル鞄　39
出会い　Встреча　40
Здравствуйте！（事務局広場）　48
カルチャー・レビュー　52
インフォメーション　54

表紙写真　本橋成一
文　村石　保

オリーブの木を植える

鎌田　實

イラク難民キャンプ（アルアリード）

1月22日に卵巣がんで亡くなった11歳の女の子ハニーンちゃんの家に食事に呼ばれた。亡くなって40日目に、日本の四十九日に近い風習があるらしい。ちょうど、そんな夕イミングだった。大歓迎された。

娘が卵巣がんの治療を半年したところで、ヨルダン王室関係の財団が行っている支援が打ち切られた。はじめからの約束だった。一番辛いときだった。

イラクを脱出できた家族だった。運がいい方と言っていいだろう。しかし、ヨルダンでの生活は貧窮を極めていた。アンマンのパレスチナ難民の居住区に住んでいた。お金はない。途方に暮れていた。

噂を聞きつけて、ＪＩＭ―ＮＥＴのアンマン事務局に飛び込んできた。ＪＩＭ―ＮＥＴの一翼を担っているスマイル子どもクリニックがハニーンの治療費をだしてくれることになった。アンマン市内の高度医療病院で治療が再開された。

すでにがん性腹膜炎になっていた。効果が期待できるのは20％、低い確率だった。

治すことは出来なかった。できるだけのことはしたが亡くなった。

亡くなったあと、お母さんが娘の夢を見た。ハニーンが夢の中に出てきた。お母さんはこっちに戻っておいでと声

をかけた。「お母さん、こっちの世界はとっても住みやすいの。こっちに居るわ。お願いがあるの。私のお墓に木を植えて」。夢の中で、お母さんは娘の声を聞いた。

前日、スタッフみんなでお墓参りに行った。オリーブの木を植えた。お母さんが言った。「日本の方々が一番辛い時に手を差し伸べてくれました。感謝しています。お墓参りまでしてもらってありがたいです」。そして、今日、食事に呼ばれたのである。

誰とはなしに食事中、2年前に亡くなったディアルのお墓を見つけられるかもしれないと言い出した。ディアルのお墓は、郊外の丘に囲まれ荒涼とした、恵まれない人達のための共同墓地にある。ディアルには墓を立ててやることができず、そのあたりに落ちている木を拾って、ディアルの名前を書いて、標とした。砂嵐がやってくれば、そんな木片は飛ばされて無くなるだろう。前回行った時には、スタッフ達は見つけられなかったという。

ディアルは悪性リンパ腫で亡くなった。イラクの14才の女の子。イラク国境沿いのルウィシッドの難民キャンプでテント生活をしていた。ぼくが半年前に難民キャンプを訪ねた時、ディアルを亡くしたお母さんはうつ状態となっていた。毎日泣いていた。

ディアルを救えなかった事でお母さんは自分を責めていた。亡くなる時に病院で十分な看病をしてあげられなかった。難民キャンプの生活の制限のためにお葬式を出してあげる事も、お墓をきちんと作ってあげる事も、お墓参りにいく事もできなかった。心の決着がまったくつけられていなかったのである。お母さんはスマイル子どもクリニックのユカリ先生の胸元で、泣いて、泣いて、泣いた。

その後、ディアルのお母さん達はアメリカへ難民として渡ることができた。昨年の秋の話だ。ディアルのお母さんの思いをなんとかしてあげたいと思った。

アメリカによって不幸のサイコロが振られた。戦争の時に使われた劣化ウラン弾がディアルの悪性リンパ腫に関係があったかどうかはわからない。でも、戦争のないイラクの時ならば、医療水準が高く、悪性リンパ腫になっても彼女はイラク国内で治療をする事ができただろう。

難民キャンプにいたために、彼女はろくな治療も受けられなかった。ぼくたちの支援でも彼女の病気を治すことは出来なかった。そして亡くなった後も不幸は続いている。イラク戦争がはじまってから不幸の連鎖がおきている。お母さんは、複雑な思いで、難民キャンプからアメリカへ脱出していったのだろう。

ディアルの家族はアメリカに行ってしまった。お母さんがずうっと心にかけていたお墓参りを誰かがしなければい

テントでの出産をおえて、精神的に疲れ、うつ状態になっているお母さん

けないと、日本の仲間たちが思った。オリーブの木を植えてあげたい。お母さんの代わりに。

みんなは墓を探せないかと思った。写真が残っていた。埋葬した時の写真。二つ隣に墓石が建っている。その墓石の名前が見えた。日付と墓石に刻まれた名前を探せば、その二つ隣にディアルの墓はあるはずと考えた。

ハニーンちゃんの家では、魚を中心にした最高のおもてなしの昼食をいただいた。ぼくたちの気持ちを伝えると、家族は「それはすばらしい。優しい。あたたかない事です」と言った。ハニーンのお母さんと、隣のおばさんと、小さな妹がもう一回お墓参りに行きたいと言い出した。ハニーンのお墓参りをしながら、同じイラクの子どもの墓探しをする事になった。

三台のタクシーをとめた。ヨルダンのタクシーは荒っぽい。とにかくムチャクチャな進路変更をし、すごいスピードで走り回る。途中で後ろを走っていたタクシーが前にでて、全てのタクシーを停めさせた。怒鳴りだしたのである。「遠い。17ヨルダン・ディナールを払わなければ、墓まではいけない」。すごい剣幕である。ここで降ろされては他のタクシーをとめられる確率は低い。しかたなく17ディナールの約束をした。

それでも、タクシーの運転手達は皆カッカしている。効

墓の前にみんなでオリーブの木を植えた

率の悪い仕事を引き受けてしまった、とむかっ腹を立てていたようだ。

イラクから抜け出てきた、バスラ産科小児科病院院内学級担当イブラヒム先生（ＪＩＭ―ＮＥＴスタッフ）が、助手席から運転手に、なぜ墓に行くのかを説明した。感激してくれた。日本人はあったかいと言い出した。荒っぽい運転は止まった。おだやかな顔になり、一生懸命話しかけてくる。一番後ろを走っていた、一番イライラし大きな声で怒鳴っていた運転手が、自分も骨肉腫になって手術をし、11年後に再発し、今その治療がおわって1年だと、身の上話をしだした。どんな理由で日本人達がイラクの子どもの墓参りをしようとしているかが分かりだしてから、ヨルダンの三人の運転手たちの目はやさしくなった。

墓地に着いた。運転手達が一生懸命、ディアルの墓を探す。日本人スタッフ達も、そして卵巣がんの子どもを亡くしたお母さん達も、みんなが必死で探した。夕暮れが迫っていた。

亡くなった２００６年5月28日、日付の近い墓標が見つかった。「このへんだ、このへんだ」みんながそちらへ移っていった。

「あった！」。見つけられた。見つかったのだ。うわぁ、とスタッフ達の歓声があがった。ディアルの墓が見つかっ

第 88 次ベラルーシ訪問団報告

順調に検査・治療が行なわれるように、臨床工学技士が機器の保守点検をする。
ベラルーシには臨床工学技士という職業は無い。ＪＣＦ第88次訪問団では、彼らの働きが、ドクター達の目の前で発揮された。

たのだ。

運転手が走っていく。途中で買ったオリーブの木と、『子どもの涙』という草をトランクにとりにいってくれた。もう一人の運転手は遠くへ走って水を汲みに行った。運転手達がやさしいのである。ディアルの墓に、ついにオリーブの木が植えられた。生きるために難民として、憎い敵のアメリカに渡っていったお母さんの代わりにオリーブの木を植えた。みんなが満足そうだった。

帰りのタクシーの中で、イブラヒム先生が、片言の日本語で一言いった。「みんなあったかい」。イントネーションがおもしろかった。「あったかい」「あったかい」みんなが口ずさんだ。

翌日ぼくらは、ヨルダンからシリアの砂漠を８００キロ走りぬけ、シリア・イラク国境近くにあるアルアリードというイラク難民キャンプに入った。連発銃カラシニコフをもった5人のイラク警察に守られながら診察してきた。テロにあわないように必死に守ってくれる。異様な空気の中で、子どもや年寄りが診察のため、わぁっと集まってきた。

砂漠に夕暮れが近づくとイラク警察が怒りだした。「暗くなれば自分たちもあぶない。あなた方を守ることができない」。診察は途中で打ち切られた。イラクを脱出した。再び砂漠の中を走りぬけ、ユーフラテス川の町、デリゾールに夜中に着いた。１泊８００円のシャワーのない安ホテル。でも生きていると実感しながら、ドロのように深い眠りについた。

３月20日でイラク戦争開戦５年。状況はますます悪化している。子どもたちを救うためにＪＩＭ―ＮＥＴの支援が必要と実感してきました。イラク国内の４つの小児病院へ４００万円の薬を毎月、送るルートを造っています。

イラクやチェルノブイリの子どもたちへ、新しい年度もよろしく、応援をお願いします。

２００７年度のご支援、心から感謝、感謝、感謝です。

常（つね）と異なること

小池　保寛（臨床工学技士）

ベトカ地区病院にて

事務局長　『この時期のゴメリは、氷点下20度になるから気をつけてね…』

臨床工学技士・A　『そうですか…では、かなりの冬物を準備していかないといけませんね？』

事務局長　『かなり持っていかないとね…』

第88次訪問団渡航3日前にこうした会話のやりとりがあった事実を、私は額から流れる汗をハンカチで拭きながら同行した臨床工学技士から聞かされ、雪のまったくない、東京より暖かいウィーン・シュヴェヒュート国際空港出口通路を歩いていました。

周囲を見渡すと、半そでTシャツの人も多く、完全な冬支度、厚手の皮のコート、風邪予防で顔の半分以上隠れるマスク姿の東洋人には、不思議そうな眼差しが送られています。

…異常気象だ、この時期、雪のないウィーンは経験がない…と、同じ便の日本人が言っていました。ここ数年いやというほど耳にする地球温暖化を、まざまざ体験すると正直ゾッとします。

4年前に、第80次訪問団で訪れたときにこうした感覚はありませんでしたが、今回は特に恐怖にさえ思えてきました。

90年代後半のロシア財政危機からは、想像もできないほどの好景気に沸くモスクワでは、ビジネスホテルシングルでも一泊四万円と急騰しているため、今回はウィーン経由でベラルーシに入国します。しかし、一泊四万円って…悲しくなります。

翌日、約1時間のフライトでミンスク国際空港に到着。通訳のイリーナさん、運転手アナトーリさんとの久しぶりの再会に喜びましたが、回りをみるとやはり雪がない…畑には、すでに、あおい葉っぱが顔を出しています。

今回は、最初から驚きっぱなしの渡航になりそうです。

超音波エコーが購入（ＪＣＦの支援による念願のエコーです）されることが決定した、チェチェルスク地区病院を訪れました。病院側はベラルーシ保健省にアロカ製のエコーを希望したのですが、保健省で指定した韓国製になったこと、学校検診での年2回の甲状腺検査の義務付けが決定して以来、検査数が増大しているので機器支援で大いに救われたことなど、コルサック・セルゲイ院長から報告をもらいました。ＪＣＦからのエコーが設置されたら、地元新聞社に掲載されることになっているそうです。支援がこうして実となり、現場で喜ばれ、治療に役立っていることを大変嬉しく思いました。

日本の外務省の支援機器も納入されていて、今後はこうした支援機器のメンテナンスも継続しなければならないと感じています。私たちの予想以上の機器がすでに稼動しています。

隣町のベトカ地区病院も、こうした外務省の「草の根無償支援」で機器が入っている病院です。ベトカ地区中心からは離れていますが、カラマツと白樺に囲まれて、春には一面の花で患者の目を楽しませる、素敵な場所にその病院はあります。

焼酎のプレゼントにご機嫌な、チェチェルスク地区病院コルサック院長と小池さん

４月にＪＣＦからの支援で保育器が納品されることが決定しています。

中古機器の搬入制限を行なうベラルーシ政府の方針に合わせて、ＪＣＦは、ここ数年支援金を現地での機器購入に役立てようと、支援方向も変わってきました。

今回の渡航で驚いたことは、この国には、半分国営の医療機器代理店、メディカル・テクニカ社が存在していて国内全土をカバーしていること、医療機器はすべてその代理店から購入すること、修理メンテナンスも行うこと、そしてなにより、その修理を何ヶ月先でも病院は待っているということでした。ＪＣＦからの医療機器も、こうした会社にメンテナンスを完全に行ってもらえる安心感があり、またそれほどの信頼をメディカル・テクニカ社が勝ち取っていることに驚きました。半分国営なので、大統領の名前でもつけたらいいのに?と思っていました。でも病院の院長室にアイドルの顔写真並に大きく貼られた大統領のポスターを前に、なにも言えませんでしたが…。

ベトカ地区病院

ゴメリ州立病院附属産院に立寄りました。ＪＣＦからの支援機器、血液検体機器に必要なカートリッジの件数の確認等、今後の支援内容の打ち合わせをしました。先に述べたメディカル・テクニカ社から購入したものは、すべて保健省に管理されるそうです。つまり、ＪＣＦから支援した血液検体の機器は登録されていないので、私たちも、病院側も、慎重に維持していかなければなりません。まだまだ、難しい課題が残っていると感じています。

ゴメリ州立病院附属産院

しかし、同行した臨床工学技士・藤牧氏が、今日修理できなければ破棄されるところだったテルモ社製シリンジポンプを、ゴッドハンド―神の手―で分解して見事に直してしまったことで「日本のエンジニアはすばらしいですね～」とセルゲイ先生から賛美の言葉をいただき、メンテナンス業務の重要性を伝えられたことで、お互いの必要性を再確認できたことは喜ばしいことです。

ゴメリ州立病院付属産院

『常と異なること』と、題した、今回の報告書を書きながら、まさに、様々な異常を感じてならなかったことを思い出しています。異常気象の、春の陽気から始まったウィーンの初日、一泊したウィーンの町並みに目立つのは、芸術家気取りの若者たちによるスプレーの落書きでした。日本でも、問題になっているこうした行動、ガッカリです。

世界金あまり現象なのか、東欧ファンドなる金融資金がベラルーシにも流入するようになり、経済特区なる地域に各国が工場を建てているらしく、すでに中国は日常雑貨、韓国は精密機器の工場を完成させています。ミンスクのホテルも軒並み宿泊料金を上げています。定宿のゴメリツーリストホテルは、インターネット環境が充実していて、ロビーにはビジネスサポートセンターなる事務所が、諸外国のビジネスマンを24時間でサポートしています。数年前まで渡航するときには衛星電話を契約して、日本との通話に一喜一憂していたのに、いまでは、日本の携帯電話はベラルーシ全土で使用可能になっています。

便利さを求めて携帯電話を持ち込んだはずが、少しの間『圏外』になると、不思議です、イライラするんですね。人にとって…なにが便利か、わからなくなります。

ほんの数年前には、考えられなかったこと、経済の発展、科学の発展、便利さの向上がすべて心地良いものではないことを痛感しています。

経済の発展の代償に人間性が奪われ、科学の発展の代償に健全な自然環境が奪われ、便利さの代償に機能を奪われ、それらの集積が『異常』となって浮き出ているのでしょうか…。

ＪＣＦが、現在取り組んでいるイラ

第88次訪問録

藤牧久芳（臨床工学技士）

ク支援も、こうした、異常な結果が引き起こした戦争がきっかけになっているし、チェルノブイリ事故も科学の発展の代償です。ゴメリに立ち入ると、そうした状況から開放される安堵感がありましたが、時代はそれを許そうとしないのか、様変わりするゴメリに勝手ながら寂しさを感じました。

「次回、また来てメンテナンスしてください」

「ホルモン測定器の支援を、是非お願いします」

各病院が、外務省との連帯を含めてＪＣＦに期待している以上、この活動に終点はないのだと確信しました。

様々な異常を感じた中で、異常ではなかったものがありました。それは、運転手アナトーリさんの大きくて、厚い、手。

握手したその手は、いつものあったかい『常（つね）』でした。

ゴメリ州立病院附属産院検査科長（左）と藤牧さん

・2月12日

チェチェルスク地区病院

Dr.コルサック・セルゲイ院長対応。

日本から焼酎のプレゼントを受け、ご機嫌であった。

エコーはアロカ製を希望したが保健省の認可が下りず残念である。

２月下旬から３月上旬に韓国製が納品の予定。

現在、ドイツシーメンス製のポータブルと１９８７年に日本から支援されたＧＥ社製があるが使用不可能である。

エコー検査の件数は年々増加の状態にあるが、原因は学校検診が１

回から２回に増えたことによるもので、非常に必要な検査。

甲状腺のエコー検査を年間２回実施しているが、検診受診者の三分の一に異常がみられる。これはベラルーシにおけるヨード摂取不足によるものである。

今後のエコー関連の支援について質問したが、ゼリー、フィルムなどの消耗品については確保できるとのこと。

今回、ＪＣＦからのエコーが支援機器として設置された後、現地新聞に掲載される予定。

・2月13日

ゴメリ州立病院附属産院

Dr.セルゲイ、Dr.スベトラーナ産院長、検査科長の女性ドクターの３人が対応。

２年前にＪＣＦにより支援された冨士ドライケム３５００は微量検体（血液）で検査できる為、ＮＩＣＵでは非常に有用な機器である。

しかし現在検査キットが不足しているとのことで、一年間に必要な検査カートリッジのリストを預かった。

超音波診断装置に経膣用と新生児心臓用のエコーのプローブがほしい。

テルモのシリンジポンプがほしい。

テルモシリンジポンプ（TE-331S）が故障のため使用不能であったが分解修理し使用可能となった。（拍手）

ベトカ地区病院

院長Dr.ナジェージダ、副院長Dr.ジーナ、タマラ市看護師長が対応。

25年前に建てられたものを改装している。

日本の外務省からの支援金で新品の医療機器が購入されてきている。

ＪＣＦからの医療機器の支援はいまのところないが、４月に保育器が納品される予定である。

イムノ・エレメント・アナライザー（ホルモン測定器）がほしい。

甲状腺異常の患者が多い。

入院のみの病院であり１４０名が入院している。手術もここで行なうが甲状腺の手術は人間環境センターで行なう。

現在１５００人の甲状腺異常者が登録されている。

医療機器は現地のメディカルテクニカという会社がバックアップ態勢にあり、対応してくれる。

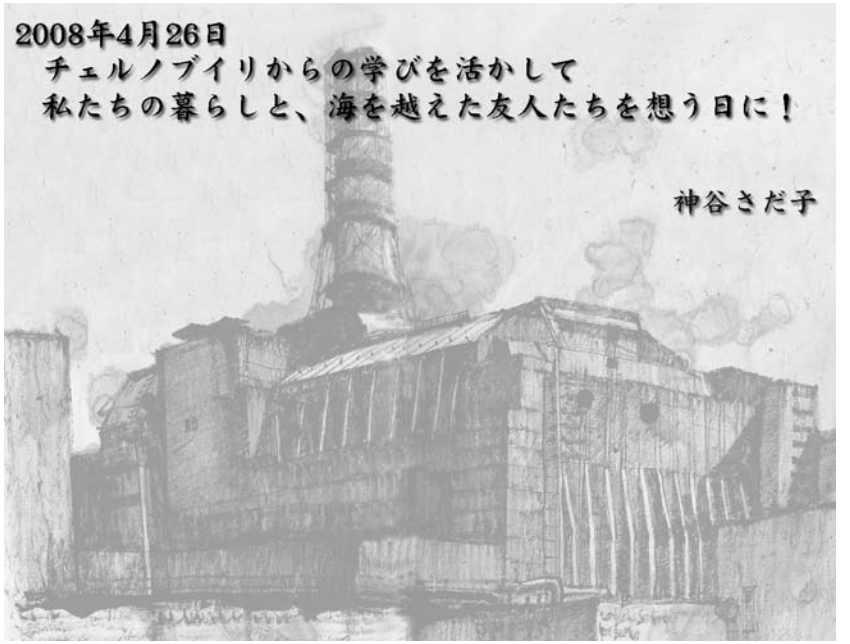
・2月14日

放射線人間環境エコセンター

Ｇ－ＣＳＦをDr.イーゴリーに届けるためにアポをとってあったが不在のため、Dr.ユーリに手渡す。小池先生によろしくお伝えくださいとのこと。

・2月17日

帰国



7月の洞爺湖サミット喧伝が始まりました。１９９６年の京都議定書の実行をめぐって、各国間でいかに二酸化炭素の排出を規制していくかというものです。私たちは、マスコミ報道に絡め取られることなく、自らの暮らしを問い直し、地域の暮らしを皆で作っていきたいと思っています。

そうです。「二酸化炭素排出規制には原発による電気エネルギーが必要だ」とさかんに言われていることに納得できないのです。『ドウシテ～?』と義憤の握りこぶしを振り上げたくなります。

化石燃料を燃やしたCO_2は出なくても、もっと危険な廃棄物が、未来永劫蓄積されていくことになります。子どもたちに明るい未来を、豊かな地球を、と願うならば、原発に頼らない暮らしをサミットで協議する位の心意気がほしいのです。

ＪＣＦを通して、チェルノブイリを見つめてきてくださった皆さんならば、きっと合意してくださると息巻いています。〝ＳＴＯＰ　地球温暖化〟すばらしいスローガンです。しかし、だまされません。安全で豊かな暮らしを願っています。

２月９日から18日まで、ＪＣＦ第88次訪問団が、ベラルーシに向いました。ところが、寒さは日本のほうが勝っていたようです。日本に居ると温暖化が実感できない日々の寒さ。一方、街中でダイヤモンドダストが舞うはずのベラルーシは、暖かい冬だったと聞きました。

昨年来、医療機器を現地購入する手続きに四苦八苦してきました。今回の渡航では、設置現場を確認できるのではないかと期待しましたが、わずかに間に合いませんでした。しかし、臨床工学技士チームが現場をみて、現地医師と意見交換してきたことで、次年度の目標が見えてきました。

・ＪＣＦがこれまでに支援してきた医療機器が、有効に使われるよう、消耗品を補充し、診断技術の向上を図っていく。

・地方の病院で、甲状腺疾患の患者が増えている。これは、１９８６年の事故前に生まれた、現在20代後半以上の大人に甲状腺疾患が出てきているためと思われる。ホルモン検査機器など、必要な医療機器を整備し、正確な病理検査ができるよう協力していく。

・甲状腺を患いながら、出産期を迎えている女性たちが、安心してお産ができるために、必要な検査機器と医療品を贈る。

４月26日は、事故から22回目のメモリアル・ディです。事故の影響を直接受けた甲状腺疾患についても、まだまだ予断がゆるせません。チェルノブイリ事故から経た月日ははるかになっても、問題は消えません。４号炉の修復工事の行方はどうなるのだろう。日本国内でも、六ヶ所の再処理工場は、地震で止まった柏崎刈羽原発は、……。

また、白血病治療後にゴメリ医科大学に入学した学生が、この夏、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の招きで、来日します。17年間、ゴメリの白血病治療に協力してきたＪＣＦは、ぜひ、彼らに松本に来ていただいて、信州大学で研修を受けてほしいと準備を始めました。

チェルノブイリから、たくさんのことを学びました。そして、更に学びを活かし、国境を越えてつながっていく道のりが続きます。

２００８年４月26日が、改めて、私たちの暮らしと海を越えた友人たちを想う日となりますように。

限りなき義理の愛大作戦 2008

いつもハートの絵を描くファラちゃん

「ナージャの村」「アレクセイと泉」アンコールロードショー

★ 2008 年 4 月 26 日 (土) ～ 5 月 2 日 (金) : ポレポレ東中野

前売券　1300 円

当日：一般 1500 円／大学・専門 1300 円／中高生・シニア 1000 円／小学生 700 円

・「ナージャの村」　① 12：30　② 17：45

・「アレクセイと泉」　① 15：00　② 20：15

アンコール上映関連イベント

【トークショー】

■ 4 月 26 日 (土) ① 12:30 の上映後　高木久仁子さん　×　本橋監督

■ 4 月 29 日 (火) ① 12:30 の上映後　前田英樹さん　×　本橋監督

【オールナイト】

4. 26 オールナイト　“原発”にまつわる作品を一挙上映！

2008 年 4 月 26 日 (土) 23:15 開場 23:30 開映（5:54 終映予定）

一般 2500 円／学割 2000 円（お得な前売券も発売中）

■上映作品

「ゴジラ」（監督：本多猪四郎／ 1954 年／ 97 分）

「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」

（監督：森崎東／ 1984 年／ 105 分）

「原発切抜帖」（監督：土本典昭／ 1982 年／ 45 分）

「アレクセイと泉」（監督：本橋成一／ 2002 年／ 104 分）

【写真展】

同時開催：本橋成一写真展

（ チェルノブイリ三部作より ）

4 月 22 日～ 5 月 2 日

Space&cafe ポレポレ坐にて (月曜定休)

問い合せ：ポレポレタイムス社（03-3227-1405）

限りなき義理の愛大作戦 2008 を終えて

佐藤真紀（ＪＩＭ―ＮＥＴ事務局長）

チョコレートはバスラの病院にも届けられた

チョコレートのパッケージをデザインするのは、一年の中でも最大の楽しみであるかたわら、責任も重い。

今、直接子供たちに接する機会が少なくなり、イブラヒムが半年ごとにどっさりと持ってくる絵の中から、素敵なものを選ぶ。そして、やっぱりイブラヒムがどっさり写してきた写真から作者の子どもを探し当てるという作業。

１万～２万個販売という数を出そうと思うとそれなりに話題性がないといけない。

今回は、先に歌があった。

イラクのチャリティソングを作ろうと、歌手のミュウさんと木嶋康晃さんからいわれてイラクの子どもに詩を書いてもらった。ちょうど、バスラのイブラヒムに電話をしたら電話口でかわいらしい声。アスラール・ジッバール、９歳の女の子。白血病だ。

神様、神様、
誰が、私たちの望みをかなえてくれるの？
たくさんの贈り物で、この日を幸せにして。
私が、学級で勉強するのを助けてくれるとうれしいなあ。
科学の力で私の頭を賢くして、心をきれいにして。
私とこの国をすべての悪いことから救ってください。

これをミュウさんが少しアレンジして、木嶋さんが素敵な曲をつけて、チャリティコンサートで歌ってくれている。イブラヒムの撮ってきた写真の中にアスラールの写真があり、かわいらしい絵を持っていた。この絵を使おう！

今回のテーマは、院内学級である。ＵＮＩＣＥＦのプロジェクトで Back to school というのがある。紛争地や被災地のこどもたちが安心して学校に行けるようにと文房具とかばんを配っている。なかなか、がんのこどもたちはそういう対象に入らない。

そこで、「がんのこどもたちだって学校に行きたい」をテーマにして、薬の支援とともに収益金を一部院内学級運営にもまわそうというものである。そもそも、こどもたちの絵は院内学級の成果物でもあるし、イブラヒムの院内学級を楽しみにやってくる子どもたちの中には、学校に行ったことのない子どもたちも多い。こどもたちを院内学級でつって、きちんと病院にこさせて治療を継続させようという意味もあるのだ。そこで昨年は絵本だったが、今年は、教科書風にデザインした。

「音楽」の教科書の担当はもちろんアスラール。イブラヒムが病院で彼女にインタビューしたビデオが届いた。

・友達はいる？
「うん、いるよ。プレゼントを持ってきてくれる。ペプシとか食べ物とか」
・友達と何するの？友達は何人いるの？名前は言える？

アスラールちゃん、院内学級で

「バッシャール、アブドゥルサラーム、ドアー…」
・友達のことが好きなんだね？
「うん。好きだよ」
・兄弟はどうしてる？
「姉は結婚してる。下の弟は5年生」
・誰が料理を作ってくれるの？
「お母さん」
・そのうち家を訪ねていくからね。（イブラヒムは、ご飯をご馳走してもらおうと狙っているのだ）

院内学級では大活躍するイブラヒム。その娘、ファートマも6歳になって、小学校に上がることになった。イブラヒムはビデオカメラを教室に持ち込む。ビデオの中のこどもたちは元気一杯に声を合わせて歌う。

私たちは1年生のクラス
私たちは賢いよ
居眠りしないよ
たくさん読むよ
黒板を見るよ
神の名を唱え
いっぱい努力しよう

2年生に進級するよ
怠けものは出て行きな
私は本を読むけど
あんたは泥で遊んでる

チョコレート・キャンペーンでは、大嶋愛が電話受付を担当した。合間のチョコ茶話会では、アスラールの曲でピアノで弾き語りで。バックに、ビデオ映像を流した。大嶋愛が音楽の先生という設定で歌っている。（以下のＵＲＬで見られます）

http://jp.youtube.com/watch?v=nOb0brKSzcw

チョコレートキャンペーンは3万7千個に増産。大成功に終わった。一方、イラクのバスラは、新しい武装勢力が生まれ、町は混乱を極めている。ファートマの小学校にも爆弾が仕掛けられたというううわさが流れ、生徒はいっせいに避難。結局爆弾はなかったが、いつ爆発が起きても不思議ではない。ファートマが怖がって学校に行きたがらないときもある。

チョコレートの図柄の中には、死んだ子どもの絵も、必ず入れている。

ファラとお母さん

ファラちゃんの絵がそうだ。彼女は、２００６年８月になくなった。サマッラが米軍に包囲され、なかなかバグダッドの病院にたどり着くことが出来なかった。私たちは、ヨルダンに避難させて入院させることも考えたが、アメリカの妨害電波のせいか、携帯電話も通じない。米軍が名付けたこの「蜂の群れ作戦」がひと段落着いたころ、ファラはやっと病院に連れてこられたがもう手遅れだった。10歳でこの世を去った。彼女はイブラヒムの個人授業をとても楽しみにしていたのだ。

谷川俊太郎の詩「死んだ男の残したものは」のなかに、

死んだこどものののこしたものは
ねじれた脚と乾いた涙
他にはなにも、残さなかった
思いでひとつ、残さなかった

というくだりがある。たしかに、僕らからしてみれば、イラクのこどもが死のうがなにも残らない。しかし、現場にいれば、思い出が残る。そして、手元にはファラの書いた落書きが残っている。

僕たちは、しっかりと、彼らが残したものを伝えなければいけないから、あえて死んだ子どもの絵も使う。

限りなき義理の愛大作戦２００９は、既に始まっているのだ。

ベラルーシの食卓

お米でハリネズミ＜ヨージキ＞

陽射しが温んでくると、気分も軽くなり、野原を歩きたくなりますね。今冬、日本の寒さは格別でした。逆にベラルーシはいつもより雪も少なかったようです。きっと、今頃は、雪解け水が河川敷を覆い、川幅が広がっていることでしょう。小路を行く人は、ぬかるみに足を捕られないよう、チョコチョコと足元を見ながら、歩きます。

雪がなくなり、緑が芽吹いてくると、森や野原には、生き物たちも動き出します。野うさぎやハリネズミはロシアの童話の主人公たちです。米粒がハリネズミのように見える「ヨージキ」を作って、今日は、子どもたちのアイドルに、食卓に乗ってもらいましょう。

＜材料＞（4 人前）

ミートボール【合ひき肉　300 g・米　1/4 カップ・玉ねぎ　1/4 個・イタリアンパセリ　適宜・牛乳　大さじ 2・塩　小さじ 1・コショウ　少々】
玉ねぎ　1/2 個・にんじん　1/3 本・トマトの水煮　1 缶・水　2 カップ・ローリエ　1 枚・塩　小さじ 2・コショウ　少々・油、バター　各大さじ 1・サワークリーム　1/4 カップ・香草（ディル、イタリアンパセリ、万能ねぎなど）

＜作り方＞

1. ミートボールを作る。
   米を洗い水気を切っておく。
   玉ねぎ、イタリアンパセリをみじん切りにする。
   材料を合わせて、よく練る。
2. 玉ねぎをうす切り、にんじんは拍子木切りにする。
3. 鍋に油とバターを熱し、玉ねぎとにんじんをしんなりするまで、炒める。
4. 水・トマトの水煮・ローリエを加えて、煮立たせる。
5. ミートボールを丸めて、加える。
6. 塩・コショウして、ゆっくり煮込む（約 20 分）。
7. 器に盛って、サワークリームをかける。
8. 香草を飾る。

モスクワ便り

今年の 3 月 2 日、ロシアでは、大統領選が行なわれました。すでに昨年の 12 月、前大統領プーチンは、自分の後継者を指名していました。ロシアでは、プーチンの高い得点によって、多数の人が彼を支持し、信頼しています。そして、彼の後継者も信頼されています。ロシアの政治の舞台にドミートリー・メドベージェフが登場したのは、予期せぬことであり、比較的最近でした。かつて、エリツィンは自分の後継者として、誰も著名な人を指名しなかったので､西側で疑問が起こりました:＜プーチン氏って誰？＞。おそらく、今、同じ質問が起こっているにちがいありません。

メドベージェフは、国内有権者の 70％以上の支持を得ました。外国人からの支持率はそれよりも高く、ロシアで投票権を持つ外国人の 85％以上がメドベージェフ候補を支持しました。ロシア市民権を持つ外国人は約 350,000 人います。有権者の大多数は、単純にプーチンとメドベージェフを同じ人間として投票した、と政治評論家はみています。人々にとって、それは保証なのです。ロシアではプーチン路線が継続し、急激な変化もびっくりするような未知もないでしょう。

しかし、必ずしもすべての人がこのような状態を気に入っているわけではありません。多くの人々は、この選挙を道化芝居、安易に稽古して仕上げたスペクタクルとみています。地下鉄や通りでこのような会話を聞くことができます：＜何、明日は選挙に行くの？＞－＜何のために？もう判っていることじゃないか。私たちが関わらなくても、もうすでに 12 月に選ばれているじゃあないか！＞。一方で、メドベージェフの対抗馬としては不足の、他の候補者にあえて投票した者も少数ながらいました。選挙への関わりはさまざまですが、結局、他の候補者たちは、プーチンの後継者として、メドベージェフの好敵手とは認められなかったということです。

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

連載随筆

NO.31

象られた微笑み

宮尾 彰

過日、高速バスを利用して上京する機会がありました。

私の後ろの座席には二人の婦人方が座り、発車と同時にやや控えめな声でおしゃべりが始まりました。私は初めのうち持参した本を読んでいましたが、途中から眼を閉じて休んでいました。背後から、他県に嫁いだ娘の話や、介護サービスを受け始めた義父の話が耳に入ってきます。

東京に着く頃、荷物の準備とともにその会話はぷつんと途絶えました。どこにでもある車中の風景ですが、私の中には複雑な印象が残りました。そこで語り明かされていたのが、詰まる所「お金」についてだったからです。

会話の端々から、お孫さんやお年寄りの姿が想像されるのではなく、彼らの生活を否応なく規定している「お金」の力ばかりが伝わってくるのでした。

それからしばらくして、今度は「暴走老人」という聞き慣れない言葉を耳にしました。

コンビニやデパートのレジで、自分への不快な接客態度に腹を立て、思い余って若い女性店員を平手打ちする老人が現れたのだそうです。

問題の背景には、急速に浸透したパソコンや携帯電話によるコミュニケーション手段に乗り遅れた老人世代の抱く疎外感や劣等感がある、とされています。

今日私たちが生活する社会では、「最新の商品」に対する「忠実な消費者」でなければ、肩身の狭い、不幸せな人間になってしまうのです。こうして取り残され、落ちこぼれてしまうことへの恐怖感が、速度を増して私たちの意識を脅かし、さらには私たちの生活を周到な仕方で或る方向に牽引し続けています。

『それを手に入れるにはどれくらいのお金が必要か?』「幸せ」や「喜び」の指標は、本当にこれだけでしょうか。

※

昔買ったままなかなか読まずにいた本を、ふと手にして読み始める。最近、こうしたことがよくあります。改めて読み直してみると、自分がその本を読めるようになるまでに、やはり時間が必要だったのだと納得するのです。

ロシアの思想家ミハイル・バフチン（本誌五十六号参照）の文章に、「喜び」について記した次のような一節を見つけました。

喜びは、生活への積極的な態度とは別のものである。喜ぶためには、私が単純素朴でなくてはならない。

喜び――それは存在のもっとも無抵抗な、頼りない、あわれな有り様である。

彼のいう「喜び」とは、一体何でしょう。どうやらそれは、私たち自身の力や「お金」によって手に入れられるものではありません。そうではなく、私たちはそれを「賜物」として受け取る」のです。

私には、ただ他者の存在によって確かにされた喜びを象ることができるだけである。私の魂が微笑むとすればそれは象られた微笑みであって、私自身から生じたものではない。

ロシアの教会には、聖書の物語や聖者達の生涯を描いたイコン（聖像画）がちりばめられています。文中「他者の存在によって確かにされた喜び」とあるのは、イコンに描かれた聖者の眼差しが湛える「微笑み」を指しています。これこそ、先祖から伝承された「様式」という賜物なのです。

私たち日本人に置き換えれば、道端に佇むお地蔵さんの微笑みです。かつては、老人も幼子も、同じお地蔵さんを見て育ち、同じお地蔵さんの微笑みをその顔に象りながら、同じ「喜び」を共有して生きていたのではないでしょうか。

АНЕКДОТ

◆- Для улучшения пищеварения я пью пиво, при отсутствии аппетита
я пью белое вино, при низком давлении - красное, при повышенном - коньяк, при ангине - водку
- А воду?
-Такой болезни у меня еще не было.

◆- Мужчина:
- Доктор, вы должны мне помочь! Каждую ночь я вижу один и тот же ужасный сон. Я лежу в кровати, когда пятеропрекраснейших женщин бросаются на меня и начинают стягивать с меня одежду.
Психиатр:
- И что же вы делаете?
- Я их отталкиваю прочь!
- Понятно. И как я могу вам помочь?
- Пожалуйста. Сломайте мне руки!

◆- Почему в бога верят так много людей?
- Потому что в сотворение мира, описанное в библии, поверить легче, чем в объяснение того же явления, данное физиками.

◆- Муж и жена откупорили очередную бутылку вина. Разливая, муж говорит:
- Готов поспорить, что ты не сможешь сказать нечто, что заставило бы меня радоваться и огорчаться одновременно.
- Хммм. Ты знаешь, а ты в постели гораздо лучше своего брата!

ジーマの

ロシア小話

◆消化改善のためにビールを飲んでいます。食欲がない時は白ワインを、低血圧なら赤ワインを、高血圧なら、コニャックを、狭心症ならウォッカを飲んでいます。
水を飲むことはありますか？
そんなひどい病気には、まだかかっていません。

◆精神科にて：医師と患者の会話
男：先生、助けてください。毎晩同じホラー夢を見るのです。私がベッドで寝ていると、5人の美女がかけ寄ってきて、私の服を脱がせようとするのです。
精神科医：あなたはどうしていますか？
男：彼女たちを押しのけています。
精神科医：わかりました。で、どんな助けが欲しいのですか？
男：私の腕の骨を折ってください！

◆―神様を信ずる人はなぜそんなに多いでしょうか。
―それは聖書で描かれている天地創造の方が、物理学者が解釈する天地創造より、説得力があるからです。

◆ある夫婦が、ワインボトルの封を切りました。ワインを注ぎながら夫が言います。
「君は、同時に私を喜ばせ、がっかりさせるようなことは言えないさ。かけても」
「…あなたはベッドで、あなたの弟よりずっといいって、知ってるのね…」

――ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート――

◎ドイツの製薬会社から沢山の薬品が寄付されたそうで、世界にこの輪が広がっていくといいなあと思っています。良いお年を！

◎いろいろなことがあった一年でした。母の介護が始まり、自分も体調を崩し、どんな環境のなかでも力強く生きている植物、月から観た地球の入りの神秘的な美しさ、深い静寂を思いました。実に実り多い一年でした。

◎ベトカ地区の皆様、お一人お一人に汚染の大地からの悪影響が少なからんことを…。

◎地震後の静かな地下の動きは3カ月で1～2㎝手を加えていないと上下に動いています。地球はあらためて生きていると実感しました。

◎年金生活のために思うように協力できず心苦しいです。皆様本当に御苦労様です。感謝です。

◎すべての人にある、生きる権利を尊重するためにお役立て下さい。

◎核のもたらす悲劇に目を向けない権力者たち。悲劇の渦中にいる人たちと共存することが権力への最大のプロテストとなることを信じて。

◎チェルノブイリの子供さんから、クリスマスカード受け取りました。嬉しかったので、お礼の気持ちをお金に替えて送ります。お役立て下さい。

◎心をこめて一生懸命描かれたクリスマスカード、ありがとうございました。たいへん心暖まる気持ちになりました。

◎今年も終わろうとしています。クリスマスカードありがとうございます。命が大切にされる世の中にと切願します。

◎念願の子供を授かりました。感謝をこめて、そして世界中の子どもの幸せを願って…。

◎クリスマスカードのお礼です。心も体も暖かく。

◎新しい命、新しい社会へ…。

◎今年もあとわずかになりました。2008年こそはイラクに平和が訪れますように。

◎クリスマスカードありがとうございます。地球上の平和はいつくるのでしょうか！

◎明けましておめでとうございます。74号の有賀さんのエッセイとカットがおもしろかったです。

◎新年を、山で登る太陽を見ながら過ごしました。この光の暖かさが地上に住む子供たちひとりひとりに平等に、降り注いでいるように、私たちもまた、子どもたちが平等に幸せになる社会をきずかねばなりません。

◎今年も『義理チョコ作戦』の季節になったんだなぁ～と、月日のたつ早さを感じました。少しでも多くの薬がイラクにとどきますように。

◎「愛の力は何ものにも勝る」そう信じます。ここから笑顔と元気と愛を送ります。

◎未永き継続を！チェルノブイリの問題は気が遠くなるほど深い。

◎コンサート感動しました。

◎大寒を迎え、一段と寒いです。日が少しずつ伸び、陽射しが少しずつ強くなって、春が近づいています。今年もできることを一つずつやり続けて行こうと、木や草や花が教えてくれることを感謝して見習っていこうと思います。

◎早く保育器の2台目が送れることを願って、前倒しで送金します。

◎寒いです。樹木は春に向かって着々と準備をすすめています。魁は盆栽から庭に移した白梅、花は盛り、香も素敵、ぼけもつぼみが紅くふくらんでいます。椿もつぼみの先は朱、春を待つ、今の季節もワクワク、楽しい。

◎環境、平和、いのちといつのまにか鎌田實さんと同じことに取り組んでいることに気づきました。介護の支えにしている恩返しと子どもたちの未来のために協力させて下さい。平和な日々を切望しています。

◎伝わらない想いも、叶わない願いも決してないと、信じて…。

◎心に愛を持っていない人は一人もいません。愛の表し方を忘れちゃってるだけです。みんなが愛の力で支え支えられる世の中になりますように。

◎月一回の平和断食をして貯めたものを送ります。わずかですが、今一番必要なところで役立てて下さいませ。

◎継続して援助活動をしてくださっていることに感謝しています。

◎甲状腺がんになった二女が今年も元気で誕生日を迎えられたことを感謝しています。

チェルノブイリの子ども達の笑顔を祈って

前号でお知らせしたＪＣＦオリジナル鞄はとても好評で、第１回製作分が全て売り切れてしまいました。一澤信三郎帆布さんに追加製造をお願いした分が３月末出来上がってきます。今回はＡＢは地色がブルーグレー、Ｃが生成り色です。ブルーグレーもきっとお洒落な鞄になると、事務局も楽しみにしています。皆さまのご注文をお待ちします！

帆布
SHINZABURO HANPU KABAN
信三郎帆布

手提げ鞄　Ａ、Ｂ（地色：ブルーグレー）

手提げ鞄　Ｃ（地色：生成）

☆綿帆布製手提げ鞄Ａ
（26 ×口元 36・底 30 × 6）
定価　4,500 円

☆綿帆布製手提げ鞄Ｂ
（29 ×口元 39・底 31 × 8）
定価　5,500 円

☆綿帆布製手提げ鞄Ｃ
（22 ×口元 39・底 27 × 12）
定価　3,500 円

◎購入お申し込み方法

- お名前
- 手提げ鞄の＜Ａ、Ｂ、Ｃ＞
- ご注文個数
- 郵便番号
- ご住所
- 連絡電話番号

を明記してＪＣＦまでお申し込み下さい。
郵便振替用紙を同封してお送りします。お手許に届きましたら、用紙に記載された代金と送料をご送金下さい。

◆ＪＣＦ／日本チェルノブイリ連帯基金
〒 390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
Fax.0263-46-6229
E-mail　jcf@jca.apc.org

がんばらない

がんばらないレーベル好評発売中

がんばらない

ひまわり

演奏

坂田明（サックス・クラリネット）
フェビアン・レザ・パネ（ピアノ）
吉野弘志（ベース）
ヤヒロトモヒロ（パーカッション）

1　ひまわり
2　見上げてごらん夜の星を
3　ウェディング・マーチ
4　遠くへ行きたい
5　死んだ男の残したものは
6　早春賦
7　水母
8　Ｇ線上のアリア

おむすび

演奏

坂田明（アルトサックス・クラリネット
朗読・ベルズ・バードコール）
黒田京子（ピアノ・うた）
バカボン鈴木（ベース）
坂田　学（ドラムス）

1　おむすび
2　マイ・ファニー・ヴァレンタイン
3　星めぐりの歌
4　死んだ男の残したものは
5　メモリーズ・オブ・ユー
おまけ　おむすび［うす塩　編］

「『ひまわり』は選曲の良さと坂田さんのサックスがとても素敵で、夜休む時にかけると、聞きながら寝てしまいます。友達にもプレゼントします」
「『おむすび』の演奏の斬新さにびっくりしました」
坂田さんのサックスは、聴く人の心に様々な印象を与えています。

がんばらないレーベルＣＤ販売の収益金は、チェルノブイリとイラクの子ども達の医薬品に使われます。

◎お申し込み方法
Fax：　0263-46-6229　又は
Email：jcf@jca.apc.org

- お名前
- 郵便番号
- ご住所
- 電話番号
- 申込枚数

を記載してお送り下さい。
2500 円＋送料 80 円
（郵便振込用紙を同封します）

会員さんを訪ねて

フストレーチャ：出会い

ВСТРЕЧА

すず木

子どもの未来につながる暮らしを

鈴木真美さんとの出会いは「六ヶ所村ラプソディー」松本上映実行委員会でした。

いつも大きな目をキラキラさせながら、どうしたら大勢の人に映画を見てもらい、一緒に六ヶ所のことを考えてもらえるかと、色々なアイデアを出し、率先して動いてくれました。若いお母さんお父さんを映画に誘い、30人を越す託児をきりもりし、73号で紹介した、『何とかしたいと思った…私のできること』というはがき付きのチラシを作ったのも真美さんでした。映画を観ただけで終わらせずに、それを何かにつなげ、行動に結びつけるための具体的な情報が一覧になったこのチラシは、可愛いカットが付いて、思わず手に取りたくなるものでした。

鈴木さんは以前、東京でジュエリーデザイナーをしていましたが、今は木曽町三岳の山の中に住んでいると聞き、「?」がふくらみ、お話しを聞きに行きたくなりました。真美さんにお願いしたら、「雪が溶けないと、登ってくるのが大変かも…」と言われて、春を待っていました。

信州もやっと少し暖かくなり、鈴木さんから、「雪が溶けたから、どうぞ～」とメールを頂いたので、お邪魔することにしました。

「以前訪ねて来た方が、こんな山道の先に人が住んでいるはずがない、と途中から引き返してしまったことがあるので、諦めずに登って来てね。山道、落石注意です。私はとがった石をふんで3回、タイヤパンクしました。道中お気を付けて!!」

ファックスの地図に添えられた注意書きを読み、果たして無事たどり着けるかしら、とドキドキしながら、3月お彼岸の日、あいにく小雨の木曽路を走ります。

国道から折れて山道、アトピー性皮膚炎に効能があると有名な釜沼温泉『大喜泉』の前を過ぎると、道はいよいよ狭く対向車が来ても避ける場所もなく（気が付くと、国道を折れてから車に全く会っていない）、引き返そうにもUターンする場所すらない…心細さがいや増す頃、景色が開けて二軒並んだお家が現れました。奥のお家に〈すず木〉の看板！

「着いた!!」

松本上映会で鎌仲監督（右）と鈴木真美さん（左）

「いらっしゃーい！」

真美さんの明るい声に到着を実感して、薪ストーブが燃える、『田舎の家』モード全開の鈴木家に…。

春休みになったばかりの小三の滉杜（あきと）君、保育園の湧士（ゆうと）君、そして昨日3匹の赤ちゃんを出産したばかりのネコのミャウが迎えてくれました。

鈴木さんは中学まで東京の大田区で育ち、その後、ご両親が神奈川の大磯にお家を建てて引越し、大学は油絵科を卒業、たまたま大学時代に彫金部だったので、4℃というアクセサリーの会社に就職しました。大学の同窓会で同級生だったダンナさんと再会して結婚します。バブルが弾けてから、自由なイメージでの製作ができにくくな

真美さんのご両親が孫のためにプレゼントしてくれた薪ストーブ、薪作りは冬の大仕！

ミャウにとっては初めてのお産、滉杜君（右）湧士君（左）もお手伝いして大興奮だったとか

り、退社。有田に陶芸の勉強に行き、体験工房で2年ほど働きました。結婚当時、ダンナさんは土建屋さん勤務のサラリーマンでしたが、長男滉杜君が2歳になった頃、会社を辞めて木工の仕事を始めたいと真美さんに相談します。子どもが生まれてから環境や食べ物のことを考えるようになった真美さんは、もっと自然の中で子育てをしたいと思っていたので、ご主人の決心に大賛成。全国の木工の訓練所を調べて、木曽上松の訓練所が設備も先生も良かったので、8年前に上松に家を借りて移り住みます。

真美さんの焼いた花立てに滉杜君がネコヤナギを活けました

上松に越してから、お隣のおじいさんに教わって始めた畑作りが楽しくて、すっかりはまってしまいました。奈良県在住の川口由一さんが提唱する、耕さず肥料をやらず、雑草と一緒に稲を育てる「自然農法」に以前から興味を持っていたのですが、その川口さんを呼んで田植えをしようと企画していたHさんと出会います。

Hさんとの出会いは真美さんに大きな影響を与えます。

「ダンナもサラリーマンを辞めてお金が無いし、でも保険料もかかるし…」

と嘆いた時、Hさんは

「お金はなくても何とかなるよ、私は保険には入っていない、病気は自分で治せばいいし、水道もガスもいらない。水は近くの湧き水を汲んできて、薪を拾って燃料にし、暗くなったら、寝る。来客が来たらランプをつけて囲炉裏を囲んで酒を飲む」

宮崎出身で木曽に流れついたHさんのそんな暮らし方は決して貧しそうではなく、頑張っているというふうでもない、シンプルで不思議な魅力がありました。

最初は収入がなくなってどうしようう、と思っていましたが、Hさんに会ったら違ってきました。私は単純だから、「何にもなくていいんだ。もう冷蔵庫も電子レンジも掃除機も無くていいんだよ！」

とダンナに話して

「まぁまぁ、待て…」

と言われました。

上松の借家の賃貸期限がきたので、もっと畑ができて、家賃も安い家を方々捜しましたが、なかなかいい家が見つかりませんでした。期限ぎりぎりの時、独り暮らしのおばあちゃんが脳梗塞で倒れて、子どもさんに引き取られ空き家になってしまったこの家を、縁あって紹介され、7年前に越してきました。

お話を聞いている間に、さっき真美さんがストーブのオーブンに入れた天然酵母のパンが焼けて、美味しいお茶が入りました。リンゴのコンポートとマーマレード入りの焼きたてパンが、真美さんの手作りのお皿に盛られて登場！どっしりとしたまな板皿には、蕾を抱いた梅の枝のような模様が見事です。松の灰の釉薬をパッパとかけた時に偶然できた模様だそうです。

滉杜君と湧土君がお茶を運んでくれます。真美さんのお話を聞いている間、二人は子犬のようにじゃれ合って、コロコロと仲よく遊びながら、お母さんの話に耳をそばだてて、時々ツッコミを入れてきたりします。

ストーブのオーブンで美味しいパンが焼けました

ダンナさんはここに来る途中にある工房で木工の仕事を、真美さんは陶芸の土を愛知からまとめて購入して、年に一～二回、土を練り、家の前にある窯で焼き物を作るそうです。

ここでの生活を始める前は「半農半クラフト」で生活を成り立たせようと思っていたのですが、始めてみると、どれも難しい。田舎暮らしはスローライフというけれど、実際はかなり忙しい。畑仕事、薪作り、待ったなしの仕事が次々です。寒さが厳しいので（毎年、冬は家の中にテントを張っていました）畑のできる時期が短く、獣害もひどい。豆をまいても、イノシシ、イタチ、タヌキ、ウサギ、モグラ、ネズミや鳥に食べられてしまう。お隣のおじさんにコツを教わって、ネットをかけ、重装備を施して、昨年は初めて一斗缶一杯の豆を収穫できました。お隣のおじさんは、山菜や茸とりを教えてくれたり、時にはタヌキやイノシシの肉を持ってきてくれたりと、ここでの生活の師匠です。

寒さは厳しいけれど、長い冬が過ぎ、山にこぶしの花が咲き出し、新芽が芽吹いて山がみどりになってゆく春、山

菜が美味しい！冬の間は凍ってしまうのですが、台所の水道は一本沢の水が引いてあります。このお水が美味しいんだ。夏、畑の全盛期、川の水の冷たさが気持ちいい。子供達は桑の実や木苺を食べ、蛍を見たりかえるの合唱を聞きながら皆で夕方散歩するのはチョッと幸せな時間です。人家がほとんどないので、夜は暗く星がすごい!!

蕗の薹見っけ！

秋の紅葉、茸とりも楽しい。栗や、くるみ、アケビ、サルなし…落ち葉で焼き芋をするのは恒例行事です。冬だって雪が積もり陽が差すとため息が出るほど美しいです。

でも、この雪が溶けてから春が始まるまでは―今の季節―景色も食べるものもパッとしません。ダンナも、「布山さん、一番さえないときに来るネー」と言ってました。ここに住んでいるから、お金がなくても畑や山の幸にありつけて、豊かなんだろうな―と感謝です。本当に、この経済状態で都会暮らしだったら、かなり絶望的なプアーだと旦那と笑ってます。

「ねぇ、蕗の薹取りに行こうよ！もう出てるよ、ボク場所知ってるからさ！」

混杜君がしきりに誘ってくれます。そこで、お話を聞くのはちょっとお休みにして、みんなで蕗の薹を取りに行くことにしました。小雨は止みましたが、日陰のそこここに雪の残る山間は、春はまだまだの寒さです。

鈴木家の前には山から流れる小川があり、その川添いをサッカーボールを器用にけりながら、混杜君は弟を連れて先導します。混杜君と湧土君は湿地帯の中にこっそり顔を出した蕗の薹をめざとく見つけていきます。

「これはまた次に来た時の分だよ！」

小さな蕗の薹は採らないようにと、注意も忘れません。蕗の薹の側には鹿やウサギの糞が点々とあり、真美さんの話していた獣害を思い出します。

びくにいっぱいの蕗の薹のお土産を持って、ミャウの待つお家へ。

「布山さんにご馳走しようと思って、鹿肉のカレーを作ったのよ、お昼にしましょう」

「鹿肉のカレーなんて生まれて初めてのご馳走!!」

「カレーには玄米のご飯がいい？さっきのパンの種で焼くナンがいい？」

欲張りな布山は思わず、

「両方食べたい！」

鹿肉のカレーはいろんな野菜や豆が入って、鹿の肉は想像したよりずっとあっさりしています。玄米ご飯は香ばしく、焼きたてのナンはかすかに甘い。この甘みは？と聞くと、ナンを作る時に、すりおろしたりんごを入れたと言います。

混杜君と湧土君もほんとに美味しそうにたっぷり食べます。最近こんなに気持ちよく食事する子どもに出会っていなかったことに気付きました。

カレーのお皿はお母さん、木のスプーンはお父さんの作品。

贅沢な生活…。

美味しいお昼を満喫した後、Hさんから借りた石臼があるから、石臼体験してみる？と誘われて、麦を挽かせてもらいました。

石臼の横の瓶には鈴木醸造の醤油が醗酵中です。

「もしかしたら納豆菌が入っちゃったかもしれないんだけど、それもまた手前味噌ならぬ、手前醤油でいいかなって…」

混杜君が瓶のふたを開けて、「納豆臭い！納豆臭い」と囃します。醤油を作るための麦を挽きたくて、Hさんから借りた石臼だそうで、学校のゆとり学習で、石臼でのきなこ作りを体験している混杜君は、慣れた手つきで準備して、石臼を廻します。途中で湧土君が、「ボクも！ボクも！」とねだって交代、上手に廻します。

保育園児の湧土君がやれるならと、布山も挑戦！

ところがところが、全然廻らない。重いのです。二人がやっている時はリズミカルに「ゴロゴロゴロ」といい音がしていたのに、『ゴ』の後が続かない。

真美さんも初めてHさんの家で挽かせてもらった時、時間をかけてもほんの少ししか挽けず、電動でやったら楽なのにと思っていたら、Hさんに、

「一回に食べる分だけやれば、全然大変じゃない、こういう道具で十分だよ」

と言われて、20キロくらい一気にやろうと考えていた真美さんは、「そうか」と目から鱗だったとか。

お話を聞いているうちに、自然に腕の力が抜けてきたのでしょうか、真美さんから、

「あら、布山さん、だんだんいい感じになってきてるよ」

と言われました。

ゴロゴロゴロゴロ…

みんなで交代して石臼を廻すと、時間までゆっくり過ぎていくようです。

真美さんのこれからの夢は?という質問に、

「自分達の食べ物は自分でうみだしたい！」

畑があるので、野菜はあまり買わないけれど、穀物が無い。是非、田んぼを作りたい。水田はまだ無理だけど今年は陸稲から、まず始めたい。そして鶏を飼うのも夢なの。鶏糞はとっても いい肥料になるし…。

温暖化について勉強したら、最近陶芸がしっくりこなくなってしまったの。焼成までにたくさんの化石燃料を使いながら、失敗することもある陶芸より、この土地で手に入る木を使った器を作ってみたいと思うようになりました。以前頼まれて、パーティー用にワイングラスと箸をセットできるお皿を作ってみたら、とっても楽しかった。虫が食った穴があるような、本職の人からすれば使えない材料、薪にするしかないというような廃材でも、何も知らない強みで、穴があったっていいじゃないと、作ってみたのね、そしたら軽くて面白い物ができました。

子どもの頃、弁護士の父から、夕飯の席で、政治や権力についての話を聞かされて育ちました。それが知らず知らずの間にインプットされてしまったのでしょうか、気がついたら六ヶ所のことに関わっていました。また最近、子供達が通う学校に隣接して携帯電話の電波塔が設置されてしまいました。携帯の高周波が子供達の健康を脅かすことが心配で、「―電磁波と健康影響を考える―たんぽぽプロジェクト」会を地域で立ち上げ活動しています。

こういう問題に関わっていろいろ勉強すると、原発も電波塔も同じ構造が見えてきます。便利さを供与すると言う言葉に隠れて、企業と政治の結びつきがあります。電波塔の問題でも、行政は基準値以内というけれども、放射能と同じで、電磁波は目に見えません。日本の基準値は、―『慎重なる回避』という予防原則の考えで基準値を設定する国々と比べて―桁違いに高い数値なのです。

チェルノブイリやイラクのことを知ったときに、何かしなくっちゃと考え行動する人と、自分とは関係ないと思う人と、その違いはどこからくるのでしょう？

電波塔問題から木曽町環境会議にも関わるようになったのですが、そんなふうに動くことで新しい出会いや繋がりができる一方、今まで仲良くしていた人が、距離をおくようになることもあるのよ…。

山の暮らしも、生活から出発した活動も、きれいごとだけではいかないようです。でもいつも前向きで明るく、一直線な真美さんを見ていると、きっとそんな大変さも吹き飛ばして、「暮らし」を守っていきそうな気がしてきます。

石臼を挽きながらお話を聞いていて、はっと気がつくともう3時、すっかり長居をしてしまいました。

鹿肉のカレーとナン、滉杜君達と採った蕗の薹や、干しぶどうから作った天然酵母の種までお土産にいただいて、山を下りました。

蕗の薹は蕗味噌にして夕飯に、天然酵母は教わったようにリンゴのすり下ろしを入れてナンを作りました。醗酵したふかふかのパン生地を練りながら、時間はかかってもこういう仕事を手放してしまうのはもったいないなぁー、と実感したのでした。

訪問の後、鈴木さんからメールがきました。

「あの後、ゆっくり、なぜこういう暮らしをしているかと考えてみれば、やっぱり、自分中心で生きてきた独身時代から母親になった、ということが大きいんでしょうね。

帝王切開で生まれ病弱だった長男、重度のアトピーだった次男とともに試行錯誤を重ねて、この子たちに導かれ今に至っている感じがします。

六ヶ所も電波塔のことも、息子達の未来を少しでも何とかしたいという想いが、私を行動に駆り立てているような気がします。

私達の人生の舵取りは、実は息子たちがしているのかな？

私と旦那は、せっせと漕ぐ水夫といったとこでしょうか…」

いつも髪をきりりと纏めた水夫・真美さん、少しでも住みよい未来へ漕ぎ着けるように、みんなで知恵と勇気のネットワークを作っていきましょう！

（事務局・布山）

東海医療科学専門学校の皆さん、新しい出発おめでとうございます！

東海医療科学専門学校の廣浦学先生は、2005 年 8 月に第 1 回スタディツアーで学生 15 名を引き連れ渡航、2006 年 8 月には 10 名の学生と第 2 回のスタディーツアーを実施しました。これまで延べ 25 名の学生がベラルーシ共和国の原発被災地を訪れ、共に医療機器の保守管理作業を体験し、現地小児病院で子供たちと交流しました。

渡航した学生達とは、不思議とロシア仲間としての団結力が未だに続いていて、既に卒業し病院に勤務する者も、今年めでたく卒業を迎える者も、みんな再度チャンスがあれば渡航したいと振り返るそうです。

先日廣浦先生から、『5 年連続国家試験全員合格！』のお知らせを頂きました！

世界中で苦しんでいる人たちへの医療支援を通じて、医療技術者を養成したい、という夢に向かって邁進し、海外支援に沢山の種をまいている廣浦先生に、エールを！

ベラルーシの人間環境センター院内学級で子どもと交流する、2005 年スタディツアーの学生

セイコーエプソン労働組合より福祉助成機器を頂きました！

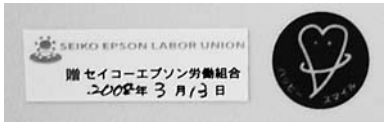
セイコーエプソン労働組合では、社会貢献事業として、組合員のみなさんのボーナス支給時にカンパを募り、集まった資金で年間約 20 団体に、エプソン機器をプレゼントしています。

ＪＣＦもこの福祉助成への申請が通って、3 月 6 日エプソンのカラーレーザープリンターを支援して頂きました。

ＪＣＦには今までカラーレーザープリンターがなかったので、カラーチラシやポスターが必要な時は、業者さんにお願いしていました。

チェルノブイリやイラクの子どもの絵を使った絵はがきなどが、事務局で手軽に印刷できるようになり、ありがたいことです。

エプソン労働組合員の皆さま、ご支援ありがとうございました！



信州発・産地直送泥つきマガジン『たぁくらたぁ』（季刊）新装開店のお知らせ

次号のグラビアでお待ちしてま〜す！（撮影　小林桂子）

64号の会員さん訪問に登場した野池元基さん発行の『たぁくらたぁ』がリニューアルするそうです！

「賢明で迷っているよりかも、愚直でまっすぐに進むんだね」

島崎藤村『夜明け前』の主人公・青山半蔵は言います。いまの時代は「夜明け前」ならぬ「夜更け前」の様相を呈しているけれど、迷っていられないのはいっしょ。進もう。

そんな思いをのせて発刊した信州発の産直泥つきマガジン『たぁくらたぁ』（バカもの、うつけもの、を意味する方言）。どうせ進むなら、お行儀よくて退屈なメディア社会から離脱して、「オン・ザ・ロード」へ。ヒッチハイクのように行き当たりばったりながらも、それゆえの出逢いに恵まれながら、さまざまな記事を掲載し続けて『たぁくらたぁ』は13号に至りました。

取り上げてきたテーマは県政、地球温暖化、クマとの共存、障害者自立支援法、給食などなど……。

さて、14号（4月末発売予定）からは、新たな旅立ち。JCFと縁の深いオフィスエムが発売元になって、デザインも一新、新鮮な空気をたっぷりと注ぎ込みながら『たぁくらたぁ』は愚直に進みます。

『たぁくらたぁ』14号予告

巻頭グラビア＆エッセー「ヤギのいる暮らし」…… 小林桂子
特集「田中康夫の落し物」
　忘れ去られた旧山口村 …… 河合博司
　山口村前村長の嘆き、住民の嘆き …… 野池元基
　ゴミにされた県廃棄物条例 …… 関口鉄夫
　これでいいのか、県温暖化計画 …… 話・茅野実
　温暖化対策・都市と農山村の連携 …… 話・阿部守一（横浜副市長・元長野県副知事）
集中連載「裁判員制度に異議あり」
リレー連載「オン・ザ・ロード」
　信州の山頭火 …… 森猿郎
　シネマ・オン・ザ・ロード …… 村石保
新連載「こんなものつくってます」 ①点字タイプライター …… 戸崎公恵
＊その他、いままでの連載も続きます。乞うご期待 !!

14号の予告を少し。2009年にスタートする裁判員制度は身近な制度にも関わらず、知ってビックリ、実に無気味な問題がたくさん潜んでいます。**「この制度に異議あり」**の集中連載を始めます。

特集は**「田中康夫の落し物」**。田中県政時代には一大騒動となりながらも、その後は忘れ去られた旧山口村の越県合併問題を取り上げ、また当時注目された県廃棄物条例や地球温暖化対策がどうなったのか、などを検証します。

文明化から離脱した旅をテーマにするリレー連載**「オン・ザ・ロード」**や障害者アートのページも登場。ぜひ新『たぁくらたぁ』をみなさんの伴走者にしてください。

『たぁくらたぁ』発行人　野池元基
【本書の仕様・定価】A5判／64ページ前後／定価400円（税込・送料別）
◎定期購読のお申し込み、お問い合わせは、左記へお願いします。
【お問い合わせ先】
〒380-0802　長野市上松城東ビル3F　オフィスエム
TEL 026-237-8100　FAX 026-237-8103
Emal emu@avis.ne.jp
URL http://www.avis.ne.jp/~emu/

戦争格差社会アメリカ

Book

田城 明

ヒロシマ記者が歩く
戦争格差社会アメリカ
著者：田城 明
発行：岩波書店
定価：1900 円＋税

著者は中国新聞特別編集委員。単身全米各地を歩き、心身の深い傷が癒えぬイラク帰還兵や亡くなった兵士の遺族、健康被害に苦しむ9・11のヒーロー、いまだ故郷に帰れぬハリケーン・カトリーナ被災者、貧困にあえぐ若者らの声を丹念に拾い、一方で政権の圧力に抗して反戦の灯火を掲げ、良心を貫く市民たちの姿も描く。アメリカの今を伝えるヒロシマ記者のルポ。

医者、用水路を拓く

Book

中村 哲

医者、用水路を拓く
著者：中村 哲
発行：石風社
定価：1800 円＋税

「百の診療所より一本の用水路を！」パキスタン・アフガニスタンで1984年からハンセン病とアフガン難民の診療を続ける日本人医師が、戦乱と大旱魃の中、千五百本の井戸を掘り、いま、全長13キロの用水路を拓く。白衣を脱ぎ、メスを重機のレバーに代え、大地の医者となった著者が、「国際社会」という虚構に惑わされず、真に世界の実相を読み解くために記した渾身の現地報告。

ロッカショ

Book

STOP-ROKKASHO プロジェクト

ロッカショ
―2万4000年後の地球への
メッセージ―
著者：STOP-ROKKASHO プロジェクト
発行：講談社
定価：1143 円＋税

青森県六ヶ所村に建設された核燃料再処理施設が稼働されると、1日に原発一年分の放射能が排出される。再処理工場で生産されるプルトニウムは半減期2万4千年、耳かき一杯の分量で百万人の致死量、核兵器の材料にもなる。日本はすでに43トンのプルトニウムを保有している。再処理工場から海と空に膨大な放射能が垂れ流され汚染が拡散される。

大審問官―自由なき楽園の支配者

Book

ドストエフスキー

大審問官
―自由なき楽園の支配者
著者：ドストエフスキー
訳者：秋津太郎
発行：文遊社
定価：1700 円＋税

ドストエフスキー著『カラマーゾフの兄弟』の第5編第5章「大審問官」は、カラマーゾフ家の次男イワンが三男アリョーシャに語って聞かせる自作の劇詩。『もしも神が存在しなければ人間にはすべてが許されている』『人間は生まれながらの反逆者であるが、同時に奴隷でもあるのだ』―神とは何か、自由とは何か。権力と自由の根源を考える精髄。解説『大審問官の大問題』（松岡正剛）と、ロシア語原文を収録。

ゴリホフ：歌劇「アイナダマール」

CD

ロバート・スパーノ指揮 アトランタ交響楽団
ドーン・アップショウ（ソプラノ）、他

ゴリホフ：歌劇「アイナダマール」
（涙の泉）
ロバート・スパーノ指揮
アトランタ交響楽団
ドーン・アップショウ（ソプラノ）、他
発売：ユニバーサル・ミュージック
定価：3000 円（税込）

作曲家オスバルド・ゴリホフは1960年生アルゼンチン出身の東欧系ユダヤ人。「アイナダマール」は、スペイン内戦初期の1936年8月、詩人フェデリコ・ガルシア・ロルカが故郷グラナダ近郊の泉のほとりで、ファシストのファランヘ党の軍隊によって銃殺されたことを題材にしたオペラ。『わたしは自由／飲みたい者にとっての泉／わたしは湧き水』―傷ついて血を流す希望。

映画『アイム・ノット・ゼア』

CD

オリジナル・サウンドトラック

映画『アイム・ノット・ゼア』
オリジナル・サウンドトラック
発売：ソニー・ミュージック
エンタテインメント
定価：3780 円（税込）

トッド・ヘインズ監督の映画『アイム・ノット・ゼア』は、6人の俳優が「ボブ・ディランをイメージした主人公」を演じる、新しいスタイルの音楽ドラマ映画。そのオリジナル・サウンドトラック盤は、インディーズ系のアーティストを中心とするボブ・ディランのカヴァー集。全34曲、2枚組セット。ディラン自身による「アイム・ノット・ゼア（I'M NOT THERE）」も収録。

Information

日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は 1991 年 1 月に設立されました。1986 年 4 月 26 日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCF は、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして 2004 年、活動の支援先はイラクへも広げられました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。

日本イラク医療支援ネットワーク（ＪＩＭ―ＮＥＴ）

イラクにおける小児がん（おもに白血病）医療支援のためのネットワーク。医療支援を行っている NGO や関心のある医師たちが、専門性を持ち、過不足のない支援を（イラクの人々が自分たちできちんとした治療ができるようになるまで）継続的に続けることを目指して立ち上げたネットワーク。JCF も構成団体の一員。

website　http://www.jim-net.net/

◆ＪＣＦ会費振込口座

賛助会費	5,000円
特別賛助会費	30,000円
事務局ガンバレ会費	10,000円
郵便振替口座番号	00560−5−43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

◆ＪＣＦ／イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

郵便振替口座番号	00520−0−81078
加入者名	ＪＣＦ／イラク支援

グランドゼロ GROUND ZERO JCF

第 75 号

発行日　2008 年 3 月 26 日
発行人　鎌田 實
発行所
日本チェルノブイリ連帯基金
イラスト題字　貝原 浩
イラスト　小林裕子
表紙デザイン　酒井隆志
スタッフ　神谷さだ子
布山みな子
協力　オフィスエム
寺島仁美
ＪＩＭ―ＮＥＴ
風樹光
片岡寿美江
印刷　電算印刷

■編集後記

落語家・立川志の輔の傑作落語を映画化した「歓喜の歌（監督・松岡錠司）」を観ました。地方の文化会館のダブルブッキングから巻き起こる騒動を、12 月 30、31 日の二日間の出来事に凝縮させ、大笑いして最後にホロリと泣かせるハートフルなドラマ。「第 9」や「竹田の子守唄」「ダニーボーイ」など、本物のママさんコーラスグループが参加してのコンサート・シーンが感動的です。今年もバレンタインキャンペーンのクレーム対応に苦慮した私は、ダブルブッキングというミスに対して、申し込んでいた二つのコーラスグループのとる行動や発言、そしてミスを犯した文化会館のスタッフがそれにどう対応するかも、大変に興味深く、身につまされもしたのでした。メインキャストも豪華ですが、脇に突然出てくる立川談志、リリー・フランキー、立川志の輔にびっくり、元気をもらえる映画でした。（布山）

販売物紹介

Book

・「チェルノブイリからの伝言」
ＪＣＦ 編（オフィスエム）1200 円

・ユーラシア・ブックレット No.21
「ベラルーシ 大地にかかる虹
～日本チェルノブイリ連帯基金の 10 年」
神谷さだ子 著（東洋書店）600 円

CD

・「坂田明／ひまわり」
2500 円

・「坂田明／おむすび」
2500 円
JCF 理事長鎌田實が立ち上げた
「がんばらないレーベル」第 1 弾、第 2 弾

・「小室等／ベラルーシの少女」
（8cm シングル盤）1000 円

一澤信三郎帆布オリジナル鞄

☆綿帆布製手提げ鞄 A
（26 ×口元 36・底 30 × 6）定価　4,500 円
☆綿帆布製手提げ鞄 B
（29 ×口元 39・底 31 × 8）定価　5,500 円
☆綿帆布製手提げ鞄 C
（22 ×口元 39・底 27 × 12）定価　3,500 円

映画パンフレット

・「ナージャの村」800 円
・「アレクセイと泉」800 円

本橋成一写真集

・「無限抱擁」
（リトル・モア）3800 円
・「ナージャの村」
（平凡社）3000 円
・「アレクセイと泉」
（小学館）3500 円

●特定非営利活動法人
日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）
〒 390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
TEL 0263-46-4218　FAX 0263-46-6229
E-mail　jcf@jca.apc.org
Website　http://www.jca.apc.org/jcf/